第九章　愛知用水土地改良区理事長の衆院選出馬

容易でない当選

伊藤佐は、愛知用水事業の本格的推進のためには、自ら衆議院議員となり、国会において政治活動で地歩を固めなければならないと思っていた。

彼の祖父両村の嗣子（伊藤佐の父）は陸軍軍医監として、石黒忠篤の父と同輩で、伊藤佐は三高、京大法科出身、戦中は南方施政官として勤務、戦後農林省開拓局長となり、石黒忠篤、那須浩博士に師事し、機を見て国会進出を志していた。また、彼の夫人は山形県・酒田の本間家の長女であった。しかし、本間家は「政治に関わらず」との家訓があり、同家の援助は受けることはできなかった。機熟し、愛知用水土地改良区理事長として次期国会に立候補を準備していた。久野庄太郎も久野源蔵もこれを支持し、自ら土地改良区理事長を譲り、酒田の本間家との連絡をとり、鳴海で開業医をしていた実弟とも力を合わせて立候補の準備をしていた。

当時のこの地区の選挙区域は、愛知二区に属し、現職に早稲田柳右エ門、久野忠治、深津玉一郎、神戸真という現職、それに社会党組織票に乗る加藤清二、県議団の推す間瀬春一、独自の宗教団の組織に乗る塚本三郎と目白押しの混戦地区となっていた。

伊藤　佐

知多の農村同志会は、農村を代表して、愛知用水を標榜する伊藤佐を推す態勢を整え、準備を進めたが、公認は現職優先で党友ということになり、愛知用水は先行の見通しはあったものの、着工のメドは立たず、依然として旧選挙体制は残っており、これを打ち破って当選するのは容易なものでなかった。とくに党の公認が現職優先ということを破ることができそうになかった。

そこで自然に選挙は〝知多の三羽烏〟と仇名（あだな）されていた、浜島、氏原、明壁の双肩にかかってきた。

国会の解散は昭和二十七年九月一日、選挙投票日は十月一日と決定。日時に追われて八月三十日、立候補するか、見送るか、伊藤本人と知多の三羽烏との最終段階の会談が隠密裏に熱田神宮宮庁応接間で話し合われた。そこで、年長（三六歳）の浜島が代表して、残念ながら今回は立候補を見送ってもらいたいと言った。

「理由は？」と伊藤佐が聞き返した。浜島は三人を代表して、

「いま農村同志会は団結して愛知用水事業の推進に当たっているが、仕事は愛知用水だけではない。また、農村同志会の力の及ぶところには限界がある。力の及ぶ範囲も知多郡と半田、それ以外は豊明まで、豊明は伊藤の出身地で拠点であるからまとまるだろうが、しかし、前々からの早稲田柳右エ門の拠点がある。これを崩すのは容易ではない。蟹江太平と土井新の縁と金の流れを断ち切るには、純真な真心では歯が立たない。

知多においても、久野忠の忠政会の選挙組織は純情一路では破れない。それに三県議の動向だ。滝田は前からの関係で久野忠、鈴置は県議団の決定で間瀬春一。純心な日高だけが伊藤ということで、女性の票は田中いとを通して久野忠、半田農学校の同窓会は深津玉一郎と

いうことになると、わが陣営は、大府は間瀬春一、大高、有松、上野は社会党と見なければならない。東浦は日高―伊藤の線で固まるが、阿久比は選挙のむつかしい所、一夜の金で動く、横須賀、八幡、岡田、旭は忠政会の本拠。

希望の持てる所は東浦、河和、豊明、東郷まで。それでも中央からの指令で公認が取れれば別問題であるが、それが無理ということになれば、今回は見送って、愛知用水の着工のメドがつき、公認が取れてから立候補したって遅くはない。私はまだ教職にあり、選挙運動にはタッチできない。いま立候補すれば、愛知用水運動の推進に妨害も起こるところも出てくる」

と懇願した。伊藤は、

「いまやらなければ意味がない。他地区の人のちょっとの邪魔が入れば、愛知用水もいつ着工できるかわからない。いまが絶好のチャンスだ」と譲らない。話し合いが続いた。

ついに伊藤が折れて、「では、次の機会」ということで一応決着した。

私と明壁、氏原は、「やれやれ」と伊藤と別れて、三人で途中で一杯やって別れた。

私も久しぶりに落ち着いた気分になり、自宅に帰って寝た。

敗戦のツケの厳しさ

その日の真夜中、来客があって起こされた。小さな家であったので、子供を納戸に押し込んで、両久野を招じ入れた。

「伊藤は選挙はどうしてもやると言うが、どうする?」と久野源蔵。私が「今日午後、今回は見送ると話し合って別れたところだ」と言うと、久野源蔵は「立候補の話は、いま直前

の話だ」と言う。それでは「明壁、氏原は何と言っておりますか」と言うと、「彼らはやると言っている」とのこと。

ことここに至っては、やむを得ない。私もついに決心して、「では、明日半田農学校に行って、家田校長に辞表を出して、私も本格的にやりましょう」と言ったところでことは決まった。

私も七年やった教職と、純真な子供達と別れる未練はあった。しかし、眼前に迫った選挙のためには躊躇は許されない。いつか、今日あることを決心していたから、気持ちの上では、さばさばしていた。

翌朝、辞表を懐にして半田農業高校の家田校長に、「選挙のため、今日から学校の教員を辞職します」と言うと、家田校長も、「惜しいなあ、今日からやめるか、眼の中に入れても痛くない奴が……」と言われた。私はその声を後にして、辞表を出して、〝鉄火場〟の選挙にとび込んで行った。昭和二十七年八月三十一日、選挙事務所は、鳴海の駅近く。扇川を渡って右側。

立候補者　伊藤佐　　秘書　浜島辰雄

選挙事務長　日高啓夫

事務所　総括責任者　久野源蔵

遊軍　久野庄太郎、明壁京一（近藤晋）、氏原柳一、

村山錐治など

昭和二十七年九月一日告示、十月一日選挙。

私は、選挙事務所で、朝は街宣車の準備、候補者、街宣車の行動計画の確認、昼は候補者とともに街宣車で演説、夜は個人演説会の弁士、終わった後、翌日の計画、毎日の睡眠は二～三時間。よく持ったものだ。

自民党の候補者の公認問題で、橋本繁蔵議長ほか、長谷川、森副知事など自民党五役が中村の料亭で密談していることを聞き、そこへとび込んで行き、「伊藤佐の公認と県議の滝田、鈴置、日高の三人を伊藤に付けてくれ」と、座敷に上がって必死で懇願した。森副知事が困って、ここは俺に任せてくれとなだめにかかったが、「あなたとはあまりにも近すぎる。ここで責任者の答えを聞くまで帰らない」と頑張った。森副知事は大府出身なので親しい間柄。自民党の五役も興味深げにながめていた。そこへ久野源蔵が入ってきて、「もういいじゃ。帰ろう」とむりやりに私を連れ出してしまった。私も若かった。三十六歳という若さで、恐れることを知らなかったし、選挙の何たるかも知らなかった。かえって逆効果であったことをあとで知った。選挙は自民党の未公認ということはなんとも不利。ついに次点に終わってしまった。

選挙は労多くして、資金面でも大変な無駄金遣いであった。しかし、愛知用水建設という面からは大きく、十分に効果があったと思う。金も、愛知用水期成同盟会、愛知用水土地改良区に関係なく、選挙運動をしたことによって、社会的にはその純正さは認められて、地域の心ある人からは高く評価された。しかし、その間、久野庄太郎さんが昭和二十五年に設立された愛知農林物産株式会社の金を持ち出し、東京からの応援弁士の交通費、宿泊代、謝礼など、現地における費用として使用した金の出所などについては誰も知らなかった。

選挙の内部にあって、面倒を見た久野源蔵とその一部の者達には感謝されたが、落選では

その償いをすることもできなかった。東京からの応援弁士は、石黒忠篤、那須浩、楠見義雄、谷垣専一、荷見安などそうそうたる人であったが、地元の住民にはその人々がどのような地位の方であるか、評価ができず、猫に小判で、残念であった。

とくに山崎先生は、ご高齢で眼が不自由にもかかわらず、夜の個人演説会の演台に立っていただくために、山崎先生を背負ってご案内申し上げたが、その任には東浦の鈴木和平があたり、元砲兵中尉で六尺豊か（一八〇センチ以上）の体躯であったが、山崎先生の大きく重かったことは、のちのちまでの語り草となった。

選挙後、安城農林の稲垣稔大先輩から「山崎先生を酷使するな」と私は大目玉を食った。久野さんは、この選挙で多大の私費を使い、後刻倒産した愛知農林物産株式会社の破産の遠因ともなった。私も半田農業高校の退職金十二万円余はいつのまにか消えていた。

愛知用水土地改良区本来の業務に専念

選挙は惨敗し、余燼いまださめやらぬ中であったが、事務所を半田市中村二一に移し、私も昭和二十七年十一月一日、愛知用水土地改良区技師（月額五千円）という辞令をもらい、土地改良区としての本来の仕事を始めた。地元から要求のあった次の建設計画にとり組んだ。

（1）知多郡阿久比村萩、宮津、横松間の農道の建設、単年度完了。
　阿久比川左岸堤防道路より横松部落の西端を通り、萩台地を経て宮津に至る幅四メートルの農道、単年度完了。

（2）上野町名和前新田農道建設、周辺区画整理を含む。単年度完了。

（3）東浦町藤江、農道建設と区画整理。

衣浦干拓事業と連接道路で藤江川左岸地区の事業。

（4）豊明村中川地区畑地潅漑事業。

中川と下高根、井堰川下流地区の砂地の畑で、鑿井してスプリンクラーを施設した。

職員として、

技師　浜島　辰雄（半田農業高校、昭和二十七年八月三十一日付退職）

書記　鈴木　光春（同校二十五年度卒）、

　　堀本　幸男（同校二十六年度卒）

技手　磯部　安夫（同校二十六年度卒）

書記　杉浦てる子（乙川）

　　渡部　幸江（半田）

昭和25年、半田に愛知用水土地改良区分室を開設

バカヤロー解散

昭和二十八年三月二十日、国会は予算問題で紛糾して衆議院解散となった。有名な「バカヤロー解散」で、社会党右派西村栄一議員が予算問題で吉田首相と渡り合い、吉田首相に「答弁できないのか、君は」と言ったので、吉田首相が興奮して、「バカヤロー」と言ったことが問題となり、内閣不信任案が可決され、解散となった。

この解散は昭和二十八年三月二十日、選挙は四月十九日となった。愛知用水土地改良区理

事長伊藤佐は再び立候補したが、相変わらず公認は現職優先で、未公認。苦戦の末、またも次点。しかし、愛知用水は、もう選挙には関係なく世銀融資事業として進んでおり、前回の選挙ほど深刻なものはなくなっていた。世銀借款も目前で、心のゆとりがあった。